

## 東アジアの遺跡視察メモから

—— 東京城・周口店・大同江流域・韓国の壁画古墳 ——

村川 行弘

### 渤海上京龍泉府址（東京城・渤海鎮）

渤海は靺鞨の通古斯族が建てた王国といわれているが、現在は靺鞨族か高句麗族かが争点となっている。清朝に代表される満州族は肅慎・濊・貊・扶餘・高句麗・挹婁・勿吉・靺鞨などと呼ばれ、女真（金）も同一種族とされている。

南北朝・隋・唐の頃は靺鞨と称し、<sup>なすい</sup>捺水（黒龍江）・速末水（松花江）の流域に居住し、隋の頃には7部に分け、黒水・粟末部が有名であったらしい。黒水部は黒龍江と松花江の合流点より下流に、粟末部は松花江の上流に拠点を置いた。唐代に粟末部より大祚榮が出て、靺鞨諸部を併合した。粟末部は高句麗に属していたが、高句麗の滅亡(668年)後、則天武后の時に酋長大乞乞仲象等内蒙古東部にいたのが唐に叛いて長白山に走った。しかし、武后は乞乞仲象の罪を許して震国王に封じた。震は易の八卦で東方の卦のことである。大祚榮はこの乞乞仲象の子である。690年に帝位につき国号を周と号した武后の聖暦元年(698年)、彼は武后に叛し、高句麗の故地に拠って王位につき震(振)国王と称した。唐の第6代皇帝となった玄宗は大祚榮を渤海郡王に封じたが、地名を賜わり、地を賜わったのではなかった。

大祚榮は国を渤海と号し、代々唐に朝貢し、冊封をうけ、3代欽茂の時に渤海国王の封爵をうけている。大祚榮による698年の建国時は東牟山に都をおき、755年に上京龍泉府に移り、一時は東京龍原府を都としたが、794年以来、約130年間、上京龍泉府を都としている。926年に契丹の耶律阿保機によって滅亡するまで14世・229年の国家であった。遺民は918年に王建が新羅を滅ぼして建国した高麗に逃れ、契丹は渤海の故地に東丹国をたてた。

渤海国の領域は、現在の牡丹江の流域を中心に朝鮮の北部の大部分と遼東以東・黒龍江以南および沿海州にまたがっていた。

渤海の代表的遺跡は、吉林省敦化県敦東城址と六頂山古墳群（貞恵公主墓など王陵）、和龍県西古城子城址と北大の古墳群（貞孝公主墓など）、琿春県の八連城址、黒龍江省寧安県上京龍泉府址と牛場土城址及び三靈屯・南陽・大朱屯の古墳群、林口県二道河子古墳群、沿海州クラスノヤルスクの城址などである。

聖武天皇神亀4年(727)より醍醐天皇延喜20年(920)まで193年間、31回の遣使があり、渤海国からは、熊・貔・虎・豹・貂の毛皮、日本からは絹・綿・絶・糸を交易品とした。到達地は出羽・佐渡・加賀・能登・越前・若狭・隠岐・但馬・出雲・伯耆・長門などで、京都の宿舎は鴻廬館であり、掌客使・慰勞使が接待した。福浦（能登客院）・敦賀（松原客院）の迎賓館も有名である。交流の成果は、本朝文粹・文華秀麗集・類聚国史・菅家文草・田氏家集・都氏文集・空海の性靈集第5「爲藤大使与渤海王子書」などにみられる。舞楽にも渤海楽の大靺鞨・新靺鞨がある。

暦の影響も大きい。参考までに日本の暦を整理すると次のようになる。

持統天皇4年(694)、元嘉暦（南北朝の宋の文帝の時）・儀鳳暦（唐の高宗の時）

淳仁天皇天平宝字7年(763)、開元大衍暦（唐の玄宗の時）

光仁天皇宝龜11年(780)、宝應五紀暦（唐の代宗の時）、用いず

文徳天皇天安元年(857)、五紀暦を用う

清和天皇貞観元年(859)、長慶宣明暦（唐の穆宗の時）、3年より用う。渤海からの献上である。

渤海の行政は5京12府62州（州の下に県を置く）で、5京が政治・経済・軍事の中心である。5京とは唐の長安を模したといわれる上京龍泉府（東京城）・中京顯德府（西古城子）・東京龍原府（琿春）・西京鴨綠府（輯安）・南京南海府（咸興）である。朝鮮民主主義人民共和国では南京南海府をはじめとする渤海遺跡の発掘調査と解明が進んでいる。上京龍泉府は日本・中国、中国と朝鮮民主主義人民共和国の手で部分的な発掘調査がおこなわれた。

上京龍泉府の所在する東京城は広大で平坦な盆地の中心部で、南には鏡泊湖があり、これを源流とする牡丹江が外城の南・東・北の城壁外を迂回して流れている。外城の城壁は内側を石で、外側を土で固め、高さ3m以上で残存しているところもある。東壁は3,359m、西壁は3,406m、南壁は4,586mで、北壁は中程が張り出した凸状で4,946m、全長は16,297mである。外城には10門があり、東西壁に各2、南北壁に各3である。南北壁の中門だけが3門で他は単門である。

大道路は11条あり、第1号大路の幅員は110m、第11号大路の長さは14,920mである。里坊の数は41（大里坊9・小里坊32）で、大里坊は皇城前を通る東西にのびた第6号大路の北側すなわち宮城と皇城の西側にある。小里坊は第6号大路の南側に位置する。里坊壁は石に土を混ぜ、厚さは1.1m、下部で1.8mある。里坊の大きさは東西464～530m・南北350～370m、小さいもので235～265mである。

上京龍泉府は1965年に中国人民解放軍によって発掘調査されたが、発掘を指導した朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学研究所歴史考古学研究室長の朴普煜氏らの案内をうけた。現状は雑草に蔽われた廃墟の状況であるが、基壇の一部は復元されている。

宮城は外城の北側の中心部で、全長3,986m、東壁900m・南側壁1,050m・西壁940m・北壁1,096mの矩形である。北壁の残存高は3～4m、宮城の中心区域は周囲2,680m・東西壁720m・南北壁620mである。宮城南門が正門で五鳳楼と呼ばれ、西側に5～6m幅の側門をもつ。渤海期の城壁が一部遺存している。

中区には7宮殿址があり、第1～第5宮殿址が五重殿である。第4宮殿址にはオンドルがある。宮城内には礎石・瓦片・土器片が散在している。

皇城は第5大路を間にして宮城の南に位置している。東側447m・南側1,045m・西側454m・北側1,050mである。皇城には東・南・西の3門がある。宮城と皇城には瑠璃瓦を葺いた壮大な宮殿や官庁が数十あり、遊戯場も付設されていたという。出土遺物には唐・高句麗の影響がみられるが、渤海三彩のように独特の優れたものもある。渤海三彩は唐三彩の影響をうけたものであるが、先年までは上京龍泉府出土の柱礎飾りや断片が知られており、唐三彩とも奈良三彩・新羅三彩とも異なる渤海独特の陶器とみられていた。最近、和龍県八家子鎮北大村の墓から渤海三彩の完形品壺が2点検出され、そのすぐれた陶芸技術が明白になった。出土地域は中京顯德府が所在した西古城や平原城である北大古城址に比較的近く、将来はさらに多量の渤海三彩や窯跡が発見される可能性が強い。渤海三彩完形品の遺物は延辺博物館に保管されており、手に触れて実見させていただいた。

国王と中央機関である三省（政堂省・宣詔省・中臺省）・六部（忠部・仁部・義部・智部・礼部・信部）のある宮城と皇城が住民地域とは高い城壁と広い道路によって厳格に区別された首都であった。現状では上京龍泉府遺構の他には出土遺物は清代の興隆寺を黒龍江省文物管理委员会の手で渤海上京遺址博物館「渤海文物展覽室」として展示されており、渤海時代の石灯幢が三経殿と大雄宝殿の間に保存されている。

（雄山閣考古学選書16・「渤海文化」朱栄憲著・在日本朝鮮人科学者協会歴史部会訳・昭和54年3月20日刊）を持参して現地を歩いた。本文はその数値と解説に従った。同行したのは杉野明夫教授。橋本久助教授である。後日、咸陽から乾県の乾陵へ行き、武則天の陵墓を実見し、壮大な規模と石人・石獸群に圧倒される思いで、渤海建国時の盛唐の状況を偲ぶことができた。北京大学の太平武先生の案内で、橋本久助教授と同行した。）

## 周口店遺址

シナントロプス・ペキネンシスの出土地である周口店は北京西南約50kmに位置する石炭岩地帯である。既往の報文を整理すると、1914年にスエーデンの地質学者アンデルソンが周口店鶏骨山に到達し、1918年2月22～23日に化石の埋蔵地を確認し、1921年初夏にヒッパリオン（三趾馬）層の発掘に來たツダンスキーに発掘調査をすすめた。周口店から西北150m・高さ100mの石灰岩の層があり、北面する崖の割れ目に動物化石がつまっていた。老牛溝とよばれていたが、ここが化石人骨を出土した遺跡である。1923年に人類遺骨片を発見し、1926年10月22日スエーデン皇太子夫妻を迎えて北京で成果が発表された。1927年から29年にかけてロックフェラーの援助でボーリン・揚鐘建・裴文中らが発掘調査をおこなった。1927年4月16日～10月18日までに3,000立方mの堆積物を除去し、洞穴の形状が明らかにされた。下顎左側の第1臼歯も発見され、シナントロプス・ペキネンシス（北京原人）の学名がつけられた。現状では猿人化石の年代は57万8千年前とされている。8,800立方mの堆積土の除去で化石資料は1,485箱、シナントロプスの歯が6個群と5個群、頭蓋骨が1点検出された。1937年までに45体分の人骨と147個の遊離した歯が発見され、1949年と51年に5個の歯と大腿骨・脛骨各1個を発見した。50～60万年前の30余体にのぼる北京猿人の発見、上洞人の発見により、東アジア洪積人類の系譜や分布が明らかとなった。

北京原人の発見された竜骨洞は深さ50m、最下層の第3層は第3紀、第4層は洪積世前期、第5層は中期初である。第5層第13地点は人骨は無いが燧石と焼骨があり、第2氷河期に当るので、中期洪積世前期、ジャワのメガントロプス・ピテカントロプスと同時期にあたる。

第6層是北京原人の層で、上層はウルティマ・ハイエナ、下層はシナ・ハイエナを特色とし、旧石器をとみなう。

第7層は人骨層、第8層は上洞で洪積世の最後期か沖積世初期である。石器の石材は石英で

ある。食用に供した動物は鹿が70%、他にはヒョウ・アナグマ・ゾウ・サイ・ラクダ・ヤギウ・水牛・イノシシ・ウマ・カモシカの骨がある。炉址の木炭はニワトコの1種である。頭骨に打傷があり、食人の風習を考える研究者もいる。

1933年裴文中は160mの山頂洞を発掘し、数千のウサギ・数百のシカ・クマ・ハイエナ・ダチョウ・トラの化石と7体の人骨を検出した。洪積世後期から沖積世初頭で、打ち殺された人骨には老年男1・女2など1家族のものがあり、身長は174cmが普通で、ホモサピエンスである。男性はメラネシア型・女性はエスキモー型のものが多く、他にクロマニヨン型のものもある。装身具の骨器・貝器・牙器も出土している。

現状は、遺跡全域を中華人民共和国国務院によって周口店遺址として保存整備され、中国科学院周口店北京猿人遺址管理所によって管理がおこなわれている。構内の資料館には北京猿人の発見に至る経緯や発掘調査の経過、地層の構造、出土遺物と化石などが整理されて展示されている。（親しくさせていただいた裴文中先生も、現在は銅像となって資料館に安置されており、感無量であった。中国人民大学清史研究所副所長の華立歴史学博士の案内で視察した。同行したのは日台礫一教授・杉野明夫教授・橋本久助教授である。メモは先学の報文やパンフによる。）

## 大同江流域の遺跡

はじめに朝鮮の古代国家編年と歴代王朝の興亡を示すと次のようになる。（日文の案内書）

古朝鮮	紀元前8～7世紀以前—紀元前108年
扶余	紀元前5世紀—494年
辰国	紀元前4世紀以前—1世紀中葉
高句麗	紀元前1世紀初—668年
百濟	1世紀中葉—660年
新羅	2世紀初～中葉—935年
渤海	698年—926年
泰封	895年—918年
高麗	918年—1392年（王建による最初の中央集権国家）

次に歴史的時代区分によって人類社会の発展過程と主要遺跡を示そう。(日文の案内書を参照)

### 旧石器時代

平壤市東南方・祥原郡黒隅里のコンモンモル遺跡(60~40万年前)を代表とする。旧石器、角犀化石、ハイエナ化石を伴出する洞窟遺跡。他に平壤市力浦区大岬洞遺跡(1977年発見、洞窟遺跡、旧人に属する力浦人化石、骨角器、動物化石出土)、勝湖区域万達里遺跡(1979~80年調査、洞窟遺跡、新人に属する万達人化石、動物化石、骨角器出土)、平安南道勝利山遺跡(旧石器時代中期、旧人の歯発見)などがある。

### 新石器時代 紀元前4,000-3,000年

櫛目文土器時代ともいう。黄海北道鳳山郡智塔里遺跡を代表とする。櫛目文土器・点線波状文土器・雷文土器・ねじれ文土器を主とし、大形の石鋤・石鎌など石器製作技法に特色がみられる。雑穀農耕・狩猟・漁撈の生活を営んだ旧朝鮮類型人の社会とされ、この文化は中国東北部遼河以東・松花江以南から朝鮮半島南部にまで及んでいる。他に三石区域湖南里・大城区域清湖洞、寺洞区域金灘里(弓山文化)、大城区域三神洞、大同江区域大同江洞、寺洞区域休岩洞、三石区域湖南里南京遺跡などがある。

### 青銅器時代 紀元前2,000年以降

無文土器時代ともいう。寺洞区域金灘里遺跡第三文化層、三石区域湖南里南京遺跡、西城区域臥山洞遺跡、勝利区域立石里、力浦区域戊辰里遺跡などが有名で、青銅製の錐・小刀・釣針・鎌・鈴・ボタン・玉類・扁平片刃石斧や石器類・板と角材の住居址・農機具・機織関係の遺物・各種の土器・小銅鐸・熊手・斧などが出土している。他に多量のブタの骨を出土した咸鏡北道の茂山遺跡、住居址とすり臼の検出で有名な龍城区域長村遺跡がある。5万平方メートルを測る南京遺跡の第1文化層からは住居址・炭化米(ジャポニカ種)・粟・きび・もろこし・大豆

・小豆などが検出され、日本列島への稲作伝播の源流が大同江流域にあったことを示している。雑穀農耕・稲作農耕・家畜飼育と利用などが生活基盤であった。この時期の殷栗支石墓は天井石の長さ8.75米・幅4.5米を測る巨大なものである。休岩里遺跡からは異形石斧が発見されている。平安北道義州郡美松里の石灰岩洞窟遺跡の上層から出土した美松里型土器は青銅器時代の文化圏と東アジアにおける稲作伝播の指標となる遺物である。

### 古朝鮮時代 紀元前1,000年以降

墓制の面からみると、この時期の中国では木槨墳と土坑墓、内蒙古では土坑墓、朝鮮では箱式石棺墓と積石室墓が盛行する時期である。紀元前1,000年期には平壤一帯で平鋤の検出が顕著であり、紀元前8~7世紀の箱式石棺墓からは遼寧式短剣(琵琶形短剣)の出土が目立つ。遼寧式短剣は大連市新金県双房の支石墓のうち6号石蓋石棺墓から美松里型土器と結びつく壺とともに検出された紀元前9世紀のものを最古とする。また、この形式の壺は遼寧省東部の遼陽二道河子・撫順大甲邦・開原李家台・清原土口子などの石棺墓からも発見され、伴出した遼寧式短剣・扇形銅斧または鋳型にも類型がみられる。遼東半島を含む遼寧東部が遼寧式短剣と美松里型土器の源流と考えられる。

紀元前5-4世紀には短剣の出土が目立ち、紀元前2世紀には長剣の出土が目立つ。紀元前3-2世紀には多鈕細文鏡・車具・金銅馬面などの出土がみられる。紀元前1世紀には青銅壺や青銅瓶がみられ、玉類・鉄製武器・把頭飾を持つ剣も多量に検出される。この時期、鴨緑江中流の水豊湖近くの蓮舞里では、28米×16.5米を測る四隅突出形積石塚が出現する。大同江流域の特色あるコマ型土器の甕と壺は忠清南道松菊里遺跡や京畿道鄭州郡欣岩里遺跡出土土器の類型であり、美松里型土器・コマ型土器・遼寧式短剣の分布は遼寧東部・吉林南部・西北朝鮮・西南朝鮮の地域にみられる。中国側からみた場合、東夷文化圏ともいえる生活圏が存在したようであり、稲作農耕の波及も同様で、山東半島・遼東半島を経たものであろう。



## 高句麗時代 紀元前1世紀—668年

2～3世紀には平壤は地方行政区域となっている。247年に大成区域に城郭が築かれて一時遷都がおこなわれたが、413年から国都建設がはじまり、427年に集安から平壤に遷都された。大城山城は蘇文峰・乙支峰・長寿峰・北将峰・国土峰・朱雀峰を結ぶ東西2.3キロ・東北1.7キロ・面積2.7平方キロ・城壁の長さ9.284キロ（3～5世紀）の広大なものである。宮殿の安鶴宮は敷地38万平方キロ・南壁の高さ12米・21棟の宮殿址・31棟の廻廊址が知られている。中宮の鷗尾は高さ2.1米（427—586年）を測る。

平壤城は牡丹峰・万寿台・大同江・普通江を結ぶ城壁の長さ23キロ・面積11.85平方キロ（52～586年）で、戸数は21万508戸とされている。

力浦区城戌辰里にある東明王陵は高句麗の始祖朱蒙の墳墓とされ、427年の遷都の際に鴨緑江北岸から移されたものという。1辺22米の上円下方積石墳で、元来は3段石組が方形に裾をとり巻いていた。羨道・前室・玄室よりなり、蓮華文の壁画が描かれている。5世紀前半の墳墓である。付近には20余の群集墳が遺存する。

定陵寺は東明王陵の陵寺であり、高句麗・定陵・陵寺などと刻した文字瓦も出土している。面積は3万平方キロ、18棟の建物と10列の廻廊址が検出され、八角9層の塔を中心に1塔3金堂の伽藍形式であった。日本の飛鳥寺はこの1塔3金堂の形式を模したものである。定陵寺は5世紀前半の建造物址である。

## 壁画古墳 4世紀—7世紀

朝鮮の壁画古墳は次のように大別できる。

- 4世紀から7世紀の高句麗壁画古墳は現在80余墓が知られ、巨石の研磨壁か漆喰壁に描かれている。
- 4世紀から5世紀は人物風俗画、王・貴族の生活記録、慣習、風俗を描写したもの。
- 5世紀から6世紀は人物風俗及び四神を代表とする。
- 6世紀から7世紀は壁面に大きく描かれた四神図すなわち青竜（東）、朱雀（南）、白虎（西）、玄武（北）の四神が代表である。

安岳1号墳は4世紀末の築造で、殿閣・人頭牛・麒麟・天馬・飛魚の図がある。

安岳3号墳は4世紀中葉で、内部は羨道・前室・東西側室・後室・廻廊に分れ、各室に色彩あざやかに壁画が描かれている。王・王妃・修寿（336年に燕から亡命し、最終的には帳下督という武官をしていた）・厨房・踏臼・井戸・厩・牛舎・角笛・格闘技・仮面劇・儀仗兵・鐘・騎馬・鼓楽隊・250人の大行列などが描かれている。被葬者については修寿の墓誌の墨書があるため修寿墓であるとか、王陵に違いないので美川王陵であるとか論議があった。しかし、この王陵は修寿が帳下督として仕え、371年に百済の近肖古王との戦いで南平壤で戦死した故国原王陵であることに間違いないと考えられる。修寿の像と墨書は左の帳下督の位置にあり、右の帳下督像図にも墨書があり、王・王妃の像のある室の入口の両脇に当る。因みに修寿像の墨書は「永和十三年十月戊子朔廿六日 癸丑使持節都督諸軍事 平東將軍撫夷校尉樂浪 相昌黎玄菟帶方太守都 郷侯幽州遼東平郭 都郷敬上里冬寿字 □安年六十九斃官」とあり、燕から亡命してきた冬寿が高句麗の各官職を歴任して357年10月26日に死去したというものである。帳下督とは侍従武官のことである。

徳興里古墳は408年の造営で、幽州13郡太守鎮墓である。広開土王の臣下であった太守鎮についての600余字の墓誌が記され、408年12月25日墓葬されたことが分る。石室は羨道・前室・玄室より成り、漆喰壁面に13郡主伺候図・太守・墓誌・行列・陽光・狩獵・天馬・牽牛などが描かれているが、太守の右の夫人像は削り取られている。太守鎮の墓誌は「□□郡信都彰都郷□廿里 釋加文佛弟子□□氏鎮仕 位建威將軍國小大兄左將軍 龍驤將軍遼東大守使持 前東夷校尉幽州刺史鎮 年七十七薨□叵永泉十八年太歳在戊申十二月辛酉朔廿五日 乙酉成遷移玉柩周公相地 孔子擇日武王選時歳使一 量葬送之□富及七世子孫 香昌仕宦日遷位至侯王造城萬功日熬牛羊酒穴米粢 不可盡擗旦食監政食一椀記 之後世寓寄無疆」とあり、幽州刺史鎮は信都（現在の博川・雲田地方）出身で、数々の官職を歴任したことが知られ、遼河を越え

た広大な地域が幽州であり、13郡名も明らかに郡太守伺候図に描かれている。すなわち「吧十三郡属幽州部彰七十五州 治廣薊今治燕國去洛陽二千三百 里都尉一部并十三郡」と墨書し、上段に燕郡・范陽・魚陽・上谷・広寧・代郡の6郡太守が並び、下段に北平・遼西・昌黎・遼東・玄菟・樂浪・帶方太守が並んでいる。この13郡が幽州で州の所在地が広薊である。壁画古墳の年代を知る基準になる以上に高句麗史の解明に重要な事実を提供した古墳である。

江西大墓・中墓・小墓はともに上円下方の墳丘円墳で巨大石室をもつ。7世紀初頭の時期で、大墓には青竜・玄武（亀と蛇）・白虎・朱雀・忍冬唐草文を切石の大壁面全体に大きく描いている。中墓・小墓には白虎・朱雀・青竜・玄武が描かれている。星辰図では6世紀の真坡里4号墳や徳花里2号墳の天井に二十八星宿が描かれている。日本の高松塚古墳（7世紀末）の天井に描かれた星宿図の祖形でもある。（以上の朝鮮民主主義人民共和国の遺跡・遺構・遺物については、本多淳亮教授と同行し、金日成綜合大学歴史学講座長の蔡熙国先生に連日案内していただき、種々の教示を得た。また、社会科学院考古学研究所の朱榮憲所長からも懇切な教示を受けた。）

## 韓国の壁画古墳

韓国古墳の出土遺物には目を見張る程の工芸技術の粋をつくしたものがみられるが、壁画古墳は北朝鮮にくらべると少ない。また切石の巨石の壁面を研磨したり、巨石に漆喰を塗って下地とした北朝鮮式の壁面は少なく、磚築室内に漆喰を塗って下地としたものや、小割石石室内に漆喰を塗って下地とした形式のものが目立つ。

百済の国都址扶余陵山里古墳では北朝鮮形式の壁画古墳がみられる。玄室天井に飛雲・蓮華図を描き、玄室北壁に玄武図を、玄室西壁に白虎図、東壁に青竜図が描かれている。

百済の遺址である公州宋山里6号墳は磚築式の横穴式石室墳であるが、磚面に漆喰を塗布して玄室南壁に朱雀図・西壁に白虎図・東壁に青竜図・北壁に玄武図が描かれている。玄室は長

さ3.7m・幅2.24mである。

大伽耶国の旧都である、高靈古衙洞古墳は割石積の横穴式石室墳であるが、8枚から成る羨道部天井石に蓮華図を、4枚の巨石から成る玄室天井石にも宝相華や飛雲文も描く蓮華図を残している。何れも漆喰を塗布して下地としている。6世紀後半のものである。

榮州郡順興面の古新羅の於宿述干墓は切石積と板石でつくられた横穴式石室墳である。羨道天井の板石に蓮華図が、玄室入口の石扉表面に男女の人物像が描かれている。ただし鮮明とは言い難い。石扉裏面にも人物像らしき痕跡がみられる。

居昌屯馬里古墳は切石に漆喰塗布の下地で、東室東壁には奏樂人物図、東室北壁にも人物図、東室西壁には奏樂人物図が描かれている。西室西壁にも人物図が描かれているが鮮明ではない。

以上が韓国の主要壁画古墳の概要であるが、北朝鮮の壁画古墳のように鮮明で遺存度のよいものは少ない。天馬塚の絵画にみられるようなすぐれた芸術は存在したが、壁画古墳は盛行しなかった可能性が強い。

（主として梨花女子大学秦弘燮教授の教示によるものである。）